平成 28 年度地域志向教育研究費助成成果報告

学生の進路実現のための地域志向教育に関する調査・研究

奈良県立大学地域創造学部
教授　小松原 尚

１．調査・研究成果の概要

教育研究では、まず第１に、学生の協力を得て学習空間環境の調査活動を行なった。教員の引率による活動と学生独自の活動に分かれるが、その成果と調査活動の結果との関連を分析してみると、いずれの場合においても、学生は学外における諸事象の観察体験を職業観の形成に役立てていることがわかった。さらに、４年次生に限らず、学年横断的に企業訪問、企業合同説明会、対人面接の学習機会に設けることが重要との結論を得た。

第２に、学会・研究会への参加を通して、他大学・他地域の地の拠点事業への取組を情報収集した。その結果、教育現場にあっても、キャリア形成を念頭においた指導を行うための工夫の状況がわかった。そして、地理学系の学会にあっても、COC や COC+にかかわる活動に関する関心の高まりを示している。「地域創生」と大学との関連性をテーマとした学会・研究集会に参加し、諸地域の取組事例に関する情報収集から、当該分野の教育にあっては、これまでも体験的教育実践の積重ねの豊富な地理教育の重要性を認識した。

最後に第３に、訪れたい魅力をインターナショナルレベルで有する奈良県にあって、暮らし続けられる条件につなげる可能性に関する調査を実際に現場に携わっておられる方々から聞き取り調査を実施した。これらの活動の結果、南和地域においては若者の定住に向け、様々な試みがなされており、それを学生自らの観察行動により、地域の熱意と定住の厳しさを体感した。

２．学習空間環境の利活用

（1）奈良県中小企業団体中央会との連携

奈良県中小企業団体中央会の企画になる、「地域企業訪問交流会」へ学生を参加させた。初年次を含む学士教育課程前期におけるキャリア形成指導の重要性は文部科学省の指摘を待つまでもなく、本学にあってもその意義は認識されている。そこで、対象者を地域経済コモンズゼミ履修中の２年生のみならず、当コモンズが提供するコモンズ共通科目である「経済地理学」履修の学生（１年次生）にも呼びかけ、参加者を募った。その結果、１年次生６名、２年次生２名での参加となった。

夏季休業中には、企業訪問による工場見学、代表者及び役員等からの業界に関する思いの聞取り、それを踏まえての学生からの質疑応答を実施した。その成果を取りまとめて中央会のご支援のもとで、デジタルコンテンツ化し、ウェヴ上でのアップロードやシンポジウムでの発表により幅広く公開した。このことは学生の勉強にもなるし、企業の魅力発信のお手伝いにもなった。

この活動に関しては、一緒に活動した、本学教員の山部洋幸が奈良県立大学コモンズ―学びの共同体―　第 10 号に報告を記しているので以下に引用させて頂く。

2016 年 9 月 2 日に地域経済コモンズの学生と一年生が奈良県の企業の魅力発信活動の一環として企業訪問を行った。この企業訪問では奈良県下の自動車販売・整備業を見学し、お話を聞くことができた。はじめに訪問したのが奈良県天理市にオフィスをかまえる株式会社ファーストグループである。ここで

は自動車整備業界の現状と、実際に整備・修理工場の見学および聞き取りを実施した。自動車整備をメインの事業にすえており、車の販売、さらには直営のカフェレストランも経営されている。奈良市押熊に出店の際は、おしゃれな外観にし、子供向けのスペースを設けた話をされていた。それはこの地域周辺が住宅地として開発された場所で、若いファミリー層に訴求する重要性からである。ファーストグループの担当者の説明によれば地域によって客層が異なるのでそれにあわせているとの事であった。これは地域によって顧客に訴求方法を変える地域マーケティングの実践といえる。その他、本社オフィスは天理の商店街の中に立地している。大阪市内等の他の選択肢からあえてこの地に中心となる事業所を作ったのは、この場所は学生の通りが多く、商店街の活性化を目的としているからとの説明を受けた。

次に訪れたのは奈良トヨタ自動車株式会社である。ここでは奈良トヨタのサービス精神や理念を中心に教えてもらった。中でも整備士としての技術とモノづくりの誇りを持ってもらうプロジェクトとして初代クラウンのレストアの様子を収めた動画を閲覧した。このプロジェクトの最後は完成したクラウンで奈良からトヨタの本社がある名古屋まで走行し、人に愛される車づくりとサービスを体現したものになっている。一方では、トヨタは最新技術の結集である水素自動車「MIRAI」に同乗する機会を得た。このMIRAIは奈良県下に2台しかない貴重なもので、学生も「静か」「スムーズな加速」といった感想を漏らしていた。ガソリンに変えて水素を動力源として走行しますが、奈良には水素ステーションがなく大阪まで給水？にいっているとのことであった。企業訪問時点では、まだ購入された方はいなかったが、将来水素ステーションが整備され普及し始めたら、水素という選択肢が当たり前の時代になるかもしれない。

今回の活動では学生は自動車整備のきつい・汚い という否定的なイメージを覆し、男女ともに取り組める魅力のある仕事であると捉え、報告会で見事、最優秀賞に輝いた。この側面からも一定の成果を得られた。

（2）コモンズゼミⅠの平城ニュータウンにおける学外実習

以下は、「コモンズ―学びの共同体―　第9号」より引用。

2016年6月16日（木）、小松原尚教授、津田康英准教授、藤森茂准教授、山部洋幸講師の引率のもと、「平城ニュータウンの 環境整備と公的サービスについて考える」をテーマとして、地域経済コモンズゼミⅠの学外活動がおこなわれ、地域経済コモンズの２年生40名ほどが参加をした。この日、踏査した平城ニュータウンは、日本住宅公団（現・都市再生機構（UR））により、大規模住宅地として開発されたが、大阪圏へのベッドタウンとしての住宅都市であると ともに、国家プロジェクトの関西文化学術研究都市の一角も 兼ねて、住環境のみでなく文化・学術・研究の中心としてふさわしい街づくりを目的に開発された住宅都市でもある。 13 時に近鉄高の原駅に集合した地域経済コモンズゼミ生のこの日の活動は、その高の原駅近くにある全国的にも珍しい駅 前の下水処理場である平城浄化センターの訪問見学からスタートした。静脈系の都市インフラ整備の実態を「下水道シ ステム」の見学を通して観察し、公的セクターによる公共サー ビスの質的・量的内容と存在意義について、各自で考えてみるということが目的である。 平城浄化センターでは、まず、私たちは生活に使用した水がどのような流れで再生されているのかという「下水処理システム」について、担当の方から実演も交え、詳しく教えていただいた。ほとんどの学生にとっては、初めて聞くお話だったので、「下水道システム」以外にも、現場で働いておられる方々の仕事の内容等、たくさんの質問をさせていただきました。 続いて、実際に施設の中を順番に歩いて回り、浄化システムの工程を見学させていた。 先に説明いただいた内容を踏まえての見学であり、なおかつ専門的な用語についても丁寧に教えていただいたこともあって、平城浄化センターという施設について深く知ることができた。 次の目的地は、平城浄化センターから東に 10 分ほど歩いたところにある音如ケ谷公園という都市公園である。現場へは奈良県と京都府の府県境沿いに、都市再生機

構（UR）によって宅地開発が進む 一帯を横目に歩くが、そこでの景観の違いや変化を見るということも、この日のフィールドワーク学習の一環となっている。 音如ケ谷公園を視察地とした主たる目的は、平城ニュータウン開発の際に発掘された古代瓦窯跡 の遺跡（音如ケ谷瓦窯跡）を都市公園として整備し、保存・展示している状況を見学するというところにある。

以上にように、当該ニュータウンにおける環境整備と公的サービスについて考えることをテーマとして、奈良市の「平城浄化センター」の下水道システムの訪問と歌姫近隣公園（奈良市）と音浄ヶ谷公園（京都府木津川市）を見学した。前者は、近鉄京都線高の原駅に近接し、多くの学生が目の当たりにする施設でありますが、見学する機会はなかった。そこでは、静脈系の都市インフラ整備の実態を「下水道システム」の見学によって観察し、公的セクターによる公共サービスの質的・量的内容とその存在意義について考える機会となった。後者では、ニュータウン開発の際に発掘された古代瓦窯跡の遺跡を都市公園として保存・展示している状況を観察し、自治体間でその方法に特徴のあることがわかった。

（3）奈良県立美術館企画展の鑑賞と磯城の里ウォーク

地域経済コモンズゼミⅡでは、教室内での学習と学外活動との両側面を実施した。まず前者の１つ目は、「自然的基礎論」 である。この構成は、人文地理学の分野を学ぶ上で必要な地形や気候に関する知識を講義するものであった。この内容は地域の様々な事象を観察、考察する上でも役に立つと考えてのことだった。 また、自然環境は産業の立地・配置の条件にも重要な影響を与えており、地域経済の学習にも関係する。次に２つ目は、研究情報の収集とそれを活用した地図や表の表現方法に関するものである。 多くの学生諸君が２年次に学んだ「地域構造論」で使用したテキストと地図帳の図表を素材として、その作成のためにはどのような調査が必要なのか、どんな技法があるのかを講義した。

一方、後者の学外活動は上記の教室内の学習と並行して実施した。一つは、教員が引率して行う学外実習である。今年度は、奈良県立美術館で企画展『雪舟・世阿弥・珠光…中 世の美と伝統の広がり』鑑賞の際に、連携展示に参加していた田原本町、川西町、三宅町の歴史や特産品を知るきっかけになり、３町合同の編集になる「磯城の里ウォークパンフレッ ト」をテキストとして、３回に分けてフィールドツアーを実施した

川西町（2016 年 12 月 8 日実施）では、面塚をはじめ様々 な歴史遺産を目の当たりにした。そして同時に町内の２つ の工業団地とインフラ整備の状況、役場から結崎駅に至る通り 沿いの小学校や住宅団地など、現在の町の人々の暮らしを見られ、地域経済の学習にも役立った。例えば、参加した学生による景観結果によると「唐院工業団 地方面の曽我川沿いには住宅地や寺社が多く存在しているのに 対し、寺川沿いの面塚周辺は人の手がほぼ入っていないであろう雑草群や農耕地などが多く存在していた」という指摘や、「人の手が入った住宅地（特に川西小 学校周辺が顕著であった）と、全く手の入っていないであろう土地の差が激しかった。また、住宅地でも富貴寺周辺の住宅地は民家としての趣を残した住宅が多く見られたが、川西小学校周辺 の住宅地は現代的な一軒家が多く見られた」ような地域比較分析もあった。

さらに年末 12 月 22 日に訪れた三宅町では、予め設定したチェックポイントを、学生の主体性 を重視した観点からグループワークを前提に、チームごとに自分たちの体力とも相談しながらコー ス設定をして町内を地図を頼りに巡る方法を採用した。参加した学生からは「多くの発見が あった今回の課外活動だが、今後の課外活動やフィールドワークなどにおいて時間的に余裕を持ったルート構築が必要になると酷く痛感した。移動に時間を 取られ、各ポイントをじっくり観察できなかったということもあるので、余裕のあるスケジューリングが今後自分が身につけなければならない能力の 1 つだということに気が付いた」とのコメントがあり、気付きが一つあったことを心強く思った。

年が改まった最初のゼミ、1 月 5 日には「田原本ふるさ とかるた」を使って新春かるた大会を行っ

た。既に読み札と絵札との対応を憶えた学生もおり、次週の田原本での活動の準備にもなった。1 月 12 日に田原本町を訪問した。グループ単位で唐古・鍵遺跡とミュージアムを軸に自由に回るとともに、「人生の先達に学ぶ職業・しごと研究」の一環として、役場の 職員５名皆様から人生観・職業観に関する聞取り調査を行なった。公務員志望が少なくない現状にあって、現場に携わる方々からの生の声を聞くことができた。例えば、 「住民の方との関わりは、協力して仕事をしていくというこ とを強調しておられた。お互いが勝手にやっているという 意識でまちづくりや地域振興に取り組むのではなく、「手 伝い、手伝う」という意識が必要だと仰っていた。しかし、 まだ一部の方からは市政としてやってもらうという考え を持った受け身の方の存在も教えていただいた。職場の 人との関わりはチームとして人間関係を大切にしているとのことでそれはどの仕事でも同じだと教えていただいた。将来仕事についた時、チームワークで動く職場での 人間関係は自分も大切にしようと思った」という学生からの報告もあった。学生たちにとって実り多い活動になったと確信した。

（4）学生の自主的な学習活動（学生の活動報告より引用）

ⅰ）バスで吉野の森ツアー

ツアーに参加している客層は泉谷さんの木材商店の同業者や身内感のある人が多く、何の関係もない人で参加しているのは私たちともう一人近畿大学の学生くらいだったが、一般の方でも参加したら絶対に楽しめるだろうと感じたため、もっと客が増えても良いように思った。奈良カエデの郷ひららで 1500 円相当の豪華なお弁当をいただき、そこでお土産も買うことができ、途中で二つほど寄った道の駅でもお土産を買うことが出来るようになっていただけでなく、久保本家酒造でもたっぷり試飲ができて地酒のお土産を購入できるようになっており、食べ物やお土産購入の面でも充実したツアーだったと感じた。

ツアーで最初に訪れた川上村は、吉野林業の発祥地である。村の面積の 97%を森林が占めており、水田は全くない。高原地区の森の中に入り、植林から伐採されるまでの流れを学んだ。木々を実際に見て、触れて、空気を感じることで、林業を身近に感じることができた。山の中は霧がかかっていて神秘的な雰囲気だった。湿気が多い環境は、水を好むスギの成長にとって重要である。スギは、真っ直ぐに根を張り、肥沃な土でないと育たないという特徴がある。一方でヒノキは、横に根を張ることもでき、やせた土地でも成長することができる。伐採する際は、写真のように上に向かって木を倒すことで、倒れる衝撃を小さくしている。皮がむかれているのは乾きやすくするためである。付けたままにした枝葉から水分が放出される（「葉枯らし」という）。関係者によると、苗を植えてもシカが食べてしまうという。自然災害以上に獣害が深刻となっている。

奈良カエデの郷「ひらら」で昼食後、森庄銘木産業株式会社と泉谷木材商店を見学した。森庄銘木産業（株）は、磨き丸太を専門に取り扱う会社である。搬出された木は水圧式自動皮むき機で皮をむかれ、ひび割れ防止のために「背割り」される。乾燥すると木は縮んで割れてしまうため、あらかじめ切り込みを入れるという。木材は温度や湿度の変化に合わせて水分を吸収・放出している。この調湿作用が木材の膨張・収縮を引き起こすのである。そのため、乾燥棟内は徹底した温度・湿度管理がされている。乾燥棟の壁は土壁で、木材から出る水分を吸収して外へ逃がす役割をしている。

泉谷木材商店では木材の加工についてお話を伺った。ひび割れ、あるいは腐って抜け落ちた節（死節）の加工、背割りをしなくても角材のサイズが変化しにくい「対面スリット」という方法など、興味深いお話ばかりだった。今回のバスツアーに参加して、吉野林業と木材について理解が深まったと同時に、もっと知りたくなった。

ⅱ）うたの魅力発見体験ツアー　-真冬の林業体験-

宇陀市菟田野にて林業体験ツアーに参加した。まず、森庄銘木産業（株）が所有する山に入り、目の前で伐採の様子を見学した。伐採は 2 人 1 組で行う。1 人がロープを木にかけて引っ張り、倒れる方向

を決める。もう 1 人はチェーンソーを入れる。枝がバキバキと音を立てながら倒れる光景は迫力があった。

山を下りた後は、森庄銘木産業（株）で専用のカマや水圧皮むき機を使って皮をむく作業を見学した。手作業と機械に分けて皮をむくことで、ごみを減らすことができるという。次に製材所「西井木材」で、丸太から角材に切り出されるまでを見学した。節があるかないかで価値が大きく変わるので、節が出ないように見極めながら加工していく。最後に割りばし工房を見学した。割りばしは見た目の美しさが重視され、品質チェックが厳しい。注文に合わせて約 10 種類の割りばしを製造し、全国に出荷している。

ⅲ）ぱーぷるでお馴染み株式会社エヌ・アイ・プランニング

大学の友人率いる学生組織 AddVenture が主催のイベントに参加した。奈良ではお馴染みの雑誌「ぱ～ぷる」を製作していることで有名な中小企業への見学ツアーである。秋には県大の秋華祭を記事に取り上げてもらえる機会もあり、奈良の身近で楽しく面白い内容を取り扱っているイメージがあった。中小企業でクリエイティブな仕事に携わることのやりがいや大変さ等のお話を聞けて私はとても刺激を受け、これが中小企業に魅力を感じ始めたきっかけになった。大好きな奈良を誰かに伝えられるような仕事に憧れがあったので、この時出会った社員さんのキラキラした表情はとても素敵にみえた。

ⅳ）ロボットアームのアクティブリンク株式会社

奈良ひとまち大学と Addventure の共催企画で伺ったアクティブリンク株式会社。農業や介護の面でも役立つであろうパワーアシストスーツ等、日本の未来を支える技術が奈良の小さな企業でも研究されているのだと知ることができ、とても良い経験だった。文系でも熱意があれば入社できるという話も聞くことができ、私を含めその場にいた学生たちは良い刺激を受けたと思う。通常重たいものはクレーンで持ち上げるすが、災害時に車輪のあるものだとどうしても活動範囲が狭まってしまう、ということでアシストスーツが考えられたとのことだ。年齢や性別に関係なく生活や労働を行える機会を提供し、「パワーバリアレス社会」を実現することで格差をなくしたいと考えているアクティブリンク。奈良から日本、さらに世界の将来を考えて開発を続ける企業を知り、とても誇りに感じた。

ⅴ）日本以外の国の方にも人気の大仏プリン株式会社

奈良ひとまち大学の企画で大仏プリン株式会社に伺いました。本店であるプリンの森には社長夫妻のこだわりが詰め込まれていて、プリンの中に迷い込んだような建物、氷の形や看板、床のタイルなど細かいところまでプリンのやわらかさ、可愛らしさが意識されていました。客が気付くか気づかないかのレベルまでこだわる姿は非常にカッコいいとも思いました。ソフトクリームの形も丸っこかったり、夜になると点灯するツリーのライトに大仏プリンのビンが使われていたりと、こだわりを挙げだすときりがありません。大人気商品、大仏プリンを生み出すまでたくさんの苦労をしてきた社長夫妻。お話をきくことで中小企業の苦しい現状と可能性を知ることができた、貴重な経験になりました。

ⅵ）宇陀市特産品審査委員会

小松原先生からの紹介で、三回生の冬頃から宇陀市の特産品審査委員会に参加した。宇陀市のことは全く何も知らなかったが、非常に楽しく取り組ませていただいた。観光地である奈良で地域の問題や観光について勉学を続けるにあたり、県だけでなく市町村がどのようなものをどのようにして特産品と認め、売り出していくと決定するのかを知ることは、奈良の観光や地域としての可能性をよりリアルに考えるために必要なことだと感じた。また、中小企業のように資金をなかなか用意できない企業が、どんな工夫をして宇陀市のアピールをしようと策を練っているのか知ることができる貴重な機会だった。

ⅶ）上牧町役場でのインターンシップ

3 回生の 2016 年 3 月 22 日から 25 日まで、上牧町役場のインターンシップに参加した。秋に上牧町のペガサスフェスタというイベントで軽音楽部の私のバンドがライブをさせていただいたときにちらっと

インターンシップの話を聞き、ご縁があって参加させていただけることになった。職員の方の資料作成の様子をすぐ横から覗くことを許していただけたため、多くの仕事を一度にこなしていく役場職員の仕事風景を間近で観察することができた。皆さんが優しすぎてまるでお客さんのように扱われてしまったが、何を質問しても優しく答えていただけて非常にためになるインターンシップだった。

３．考察

奈良県立大学にあって地（知）の拠点事業の実施をみて、４年を経過した。この事業は大学教育改革を一層加速せることにその眼目があり、地域志向教育は改革を推進するための重要な部分となっている。本研究にいう地域志向教育とは日常の講義、すなわち座学で学んだことを大学の外で学生自らが実際に確認する教育である。同時に、学生が訪れた地域や事業所において、学生の学習活動がそこで暮らす人々の生活や労働の継続のための刺激となるものである。そして、学生自身も自らの活動が社会化されることに気付く学習活動の一環でもある。その意味で、地域志向教育の充実には2015年度にこの研究助成にて考察した「地・学相互貢献」が不可欠である。

2016年度は「学生の進路実現」のためのキャリア教育を学外実習でも行う上で、「地・学相互貢献」がどのように機能するかを研究した（第１表）。学びの主体者である学生を調査活動の補助員としても活用し、彼らの学習活動を通して、それぞれの場面おける大学と自治体や事業所の学生に対する対応を通した「相互貢献」の現状を明らかにした。

第１表　教員引率による学外実習（2016年度）

番号	活動日	活動のテーマや対象	所在地	対象学年
1	2016/06/16	平城浄化センター、歌姫近隣公園ほか	奈良市	２年
2	2016/07/09	琵琶湖疎水記念館、京都国立近代美術館、京都伝統産業ふれあい館	京都市	１・４年
3	2016/08/08	役場、道の駅、森林組合、民俗資料館ほか	黒滝村	１年
4	2016/09/01	企業訪問・社長インタビュー、機械部品製造業	奈良県	１年
5	2016/09/02	企業訪問・社長インタビュー、自動車整備業	奈良県	１・２年
6	2016/09/06	奈良県立美術館、奈良県にゆかりの富本健吉の作品の鑑賞	奈良市	１・４年
7	2016/10/16	奈良地理学会のエクスカーション	王寺町	３年
8	2016/11/16	奈良県立美術館、『雪舟・世阿弥・珠光』展、川西、三宅、田原本町による連携展示	奈良市	３年
9	2016/12/08	能の観世座・結崎ネブカ発祥の地を歩く	川西町	３年
10	2016/12/22	地図を手に太子道と古墳群を歩く	三宅町	３年
11	2017/01/12	フットマップを利用し、古代風景と陣屋町の佇まいを観察	田原本町	３年
12	2017/02/14	アサヒ飲料とヤクルトの工場見学	兵庫県	２・4年

※　小松原が引率にかかわったもののみ。

近年の大学教育にあっては学士教育課程前期（１，２年次生）におけるキャリア教育も重要視されるようになっている。例えば、第１表の番号５の活動においては、企業訪問を通じて高校時代の当該事業

のネガティブなイメージがポジティブなそれに転換したとの認識を学生が持つようになった。その点を含めて企業団体主催のコンペティションにおいて報告したこの1・2年生チームは、その最優秀賞を獲得した。このことは、１，２年次生においてもキャリア教育の重要性、中でも学外における体験的な教育環境の提供の重要性を実証的に明らかになったといえる。さらに、企業の側からみると従来の定説を180度転換し企業のイメージ向上に貢献したことになる。このことは、上記の「地・学相互貢献」を具体化したといえる。

4 年次生は就職活動など進路にかかわることで慌ただしい日々となったため日程調整は不調で、ゼミメンバー一緒での活動は行わなかった。それに代わって、他学年の活動と合同で見学を実施した。まず、京都市内の蹴上・岡崎方面での活動である（第1表番号2）。1学年の経済地理学履修者の有志と一緒にまわった。京都市のもつ芸術・文化都市としての側面のみならず、工業都市としての京都も認識できたと思う。次は奈良県立美術館での活動である。地元、奈良市内でしかもわれわれの大学から徒歩10分程度の近距離にある美術館である（第1表番号6）。この時も1年生が参加した。さらに、解説ボランティアの方からの作品解説のお陰で、作品の制作に至る背景など、奥行きのある鑑賞を行えたと思う。最後は兵庫県内の工場見学である（第1表番号12）。コモンズゼミⅠ（2年次）の学生諸君と一緒に飲料メーカーを2社訪問した。三ツ矢サイダーを傘下に置くアサヒ飲料の明石工場とヤクルトの三木工場で、原材料の調整から製品の製作工程、品質管理の状況についても説明を受けた。

これまでの活動は、職業選択にとって重要な幅広い職業観の醸成に役立ったと考えられる。公務員（本学からは一般行政職、総合職のみ受験可能である）志望の多い本学にあっては何にでもなれるという教育が必要である。その教育のプロセスにあって学外の教育環境との連携による体験的活動が役立つのである。小松原の直接指導にかかる学生で2017年3月卒の学生は4名だったがいずれも希望する職業に就くことができた。そしてその中で3名が公務員としての職を得られた。第一義的には本人の努力であるが、そのバックボーンとしてこれまでの学外での体験活動の成果とも考えられるのである。